白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

中高校生　作文の部　最優秀賞

「命を救う、その先へ」

鶴来高校三年　北（きた）　愛葉（まなは）

「もし、あのときの自分に知識があったら、何かできたのだろうか。」

私は、目の前で人が倒れたときのことを今でも覚えている。助けたいという気持ちはあった。しかし、何をすればいいのか分からず、ただその場にいることしかできなかった。人を助けたいと思っているのに、何もできない自分が悔しかった。そして、「次に同じような場面に遭遇したときには、何かできる自分になりたい」と思うようになった。この経験が、私が救急救命士を目指すようになったきっかけである。

救急救命士について知る中で、私はこの仕事が、ただ傷病者に処置をするだけの仕事ではないことを知った。救急現場では、限られた時間の中で傷病者の状態を判断し、必要な処置を行いながら、病院へつなげなければならない。また、突然の事故や病気に直面した傷病者や家族は、大きな不安や恐怖を感じていると思う。そのため、専門的な知識や技術だけでなく、冷静に判断する力、人と協力する力、相手の気持ちを考える力も必要なのだと思う。

私は、高校生活の中で、将来の自分につながるさまざまな経験をしてきた。

クラス会長を務めた経験からは、人をまとめることの難しさと、周りの人と協力することの大切さを学んだ。自分の考えを伝えるだけでなく、周りの意見に耳を傾け、一人ひとりの気持ちを考えることが必要だった。

部活動ではキャプテンを務めた。チームを引っ張る立場になったことで、自分の行動が周りに与える影響や、仲間を支える責任を感じるようになった。自分一人が頑張るのではなく、仲間と声を掛け合い、支え合うことの大切さも学んだ。また、陸上競技を続ける中では、苦しい練習や思うように結果が出ないときでも、諦めずに努力を続ける力を身につけてきた。

これらの経験は、将来、救急救命士として働くときにも生かせると思う。救急現場では、一人だけで傷病者を救うことはできない。救急隊員同士で協力し、それぞれが自分の役割を果たしながら、一つの命を救うために行動する必要がある。私はこれまでの経験を生かし、周りを見ながら行動し、仲間から信頼される救急救命士になりたい。

また、地域のボランティア活動にも参加してきた。能登半島地震に関するボランティア活動や、花を植える活動、おついたちマーケットでの活動などを通して、自分が誰かのために行動することの大切さを学んだ。大きなことができなくても、自分にできることを考えて行動する。その小さなことが、誰かの支えになることを知った。

そして私は、将来もう一つ実現したい目標がある。それは、英語を話せる救急救命士になることである。

私は、英語を話せること自体が特別なことだとは思っていない。私が英語を身につけたいと思う理由は、言葉の壁によって、目の前の人を十分に理解できない状況を少しでも減らしたいからである。

救急の現場では、傷病者の痛みや症状だけでなく、「怖い」「助けてほしい」という気持ちを理解することも大切だと思う。外国人の傷病者の場合、言葉が通じないことで、自分の症状や気持ちを十分に伝えられず、不安を抱えたままになることもあるかもしれない。私は、言葉が通じないという理由で、その人の「怖い」「助けてほしい」という気持ちを受け取れないことは避けたい。

だから私は、傷病者の言葉に耳を傾け、症状だけでなく、その人が抱えている不安や恐怖にも寄り添える救急救命士になりたい。そのために、救急救命に関する知識や技術だけでなく、英語でコミュニケーションを取る力も身につけたいと思っている。

今の私は、まだ思うように英語を話せるわけではない。勉強しても結果が出ず、悔しい思いをしたこともある。しかし、できていないことを理由に諦めたくはない。将来、目の前の人の気持ちを理解し、安心させるために必要な力なら、今から少しずつでも身につけていきた

い。英語を学ぶことも、私が救急救命士になるための大切な一歩だと思っている。

救急救命士になるまでには、これからたくさんの勉強や訓練が待っている。専門的な知識を身につけるだけでなく、体力や精神力を鍛え、どんな状況でも冷静に行動する力も必要になる。思うようにいかないことや、自分の力不足を感じることもあると思う。それでも、私は簡単に諦めたくない。

なぜなら、私には「何もできなかった自分を変えたい」という思いがあるからだ。

あの日、目の前で人が倒れたとき、私は何もできなかった。しかし、その経験があったからこそ、私は「誰かを助けられる人になりたい」という夢を持つことができた。

数年後、私は救急車に乗り、誰かのもとへ向かっていたい。そのとき、目の前の傷病者に迷わず手を差し伸べ、「大丈夫です。私たちが助けます。」と言える人になりたい。そして、日本人でも外国人でも関係なく、目の前で助けを必要としている人の命と気持ちの両方に寄り添える救急救命士になりたい。

「あのとき、何もできなかった」という悔しさを、私はこれからの努力に変えていく。知識を学び、技術を身につけ、体力を鍛え、英語を学ぶ。そして、周りの人と協力しながら、一人でも多くの人を救える力を身につけていく。

いつか、救急救命士として現場に立ったとき、あの日の自分に「もう大丈夫。今の私は、目の前の人のために行動できる」と言えるようになりたい。

その未来は、まだ先にある。だからこそ、今の私にできることを一つずつ積み重ねていく。何もできなかった私から、誰かを救える私へ。その一歩を、これから踏み出していきたい。

